

あつたてやの

あるところに、お母さんとお父さんと、おぎという名前の娘が、暮らしていました。ある日のこと、お母さんとお父さんは、山へ仕事に出かけようとして、

「わたしらの留守のあいだに、山んばでも来たらたいへんだから」といって、おぎを俵の中に入れて、二階の天井につるしておきました。

ふたりが出かけてしばらくすると、山んばがやって来て、うちの中に入って来ました。そして、いろいろのそばにくしがひとつ落ちているを見つけました。山んばは、くしをひろいあげて、

「くし、くし。おぎのいるとこ教えないと、ふつつあばいて、食うぞ、食うぞ」といいました。くしは、

「庭のすみに、いるよ、いるよ」と答えました。

山んばは、庭のすみをさがしましたが、おぎはいません。そこで、また、

「くし、くし。おぎのいるとこ教えないと、ふつつあばいて、食うぞ、食うぞ」といいました。くしは、

「台所のすみに、いるよ、いるよ」といいました。

山んばは、台所のすみをさがしましたが、やっぱりおぎはいません。

「くし、くし。おぎのいるとこ教えないと、ふつつあばいて、食うぞ、食うぞ」

「寝間のすみに、いるよ、いるよ」

山んばは、寝間のすみをさがしましたが、おぎはいません。

「くし、くし。おぎのいるとこ教えないと、ふつつあばいて、食うぞ、食うぞ」

すると、くしは、今度は、

「二階のすみに、いるよ、いるよ」といいました。

山んばは、二階に上がって行って、さがしましたが、おぎはいません。けれども、天井に俵がつるしてあるのを見つけて、下ろして開けてみました。すると、俵の中に、おぎが入っていました。山んばは、おぎをふつつあばいて、まるごと食べてしまいました。ゆうがた、お母さんとお父さんが帰ってきました。すると、おぎがやまんばに食べられていました。

その晩、お父さんは、山んばの家に行って、いろりの上の天井にかくれました。

やがて、山んばが、どこから帰って来て、いろりでもちを焼きはじめました。そして、背あぶりしているうちに、山んばは、こくん、こくんといねむりを始めました。それを見て、お父さんは、いろりのもちを、天井から、ヨシで、ずぶんとさしてはひっぱりあげて、みんな食べてしまいました。

山んばが目覚まして、もちを食べようとすると、何もありません。山んばは、

「いろりの神さまが、あがらしたか、あがらしたか」といいました。そして、こんどは、甘酒をなべに入れて、いろりにかけました。そして、また、背あぶりしているうちに、こくん、こくんといねむりを始めました。お父さんは、甘酒を、天井から、ヨシで、つうつうと、飲んでしまいました。

山んばが目覚まして、甘酒を飲もうとすると、何もありません。

「いろりの神さまが、あがらしたか、あがらしたか」

山んばは、もう寝ることにして、

「木の唐櫃に寝ようか、石の唐櫃に寝ようか」といいました。すると、お父さんが、

「木の唐櫃、木の唐櫃」といいました。山んばは、

「いろりの神さまは、木の唐櫃で寝ろとおっしゃるか」といって、木の唐櫃に入って寝ました。

お父さんは、下りて来て、木の唐櫃に、きりできりきり、きりきりと、穴を開けました。山んばは、

「きりきり虫が、鳴くよ、鳴くよ。あしたは天気だ、天気だ」といいました。

お父さんは、穴の開いたところへ、熱いお湯をつぎこみました。山んばは、死んでしまいましたとさ。

いきがぼーんとさけた

村上郁再話

資料『瞽女のごめんなんしよ』水沢謙一／講談社